



[エマオ通信]

No. 7 (2025年2月15日発行)

発行人 高良 研一 (会長)

編集人 稲川 仁 (副会長・事務局長)

発行者 木村 均 (書記)

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 「伝道者養成と教会形成を担う働き」

24/25年度主題: 「私と教会が元気になるには」

聖句: わたしたちの心は燃えていたではないか (ルカ 24:32)

<メッセージ> 「経験交流の場を」

奥村 敏夫 (佐賀教会/大川伝道所 牧師)

少しずつ春の訪れを感じるころになりました。お変わりはありませんか? コロナ全盛期の数年前に「全国壮年大会」の主題講演をさせていただき機会をいただき、ありがとうございました。アーカイブを通して1000件を超える視聴をいただき、驚いております。釧路の地に身を置きながら長い間「教会の再生と復興」について取り組んできたことを中心にお話ししたつもりです。

ご存じの方もおられるかもしれませんが、いま私は佐賀教会と大川伝道所の兼牧に呼ばれ、年を顧みず一線に立たされています。ある種の危機を迎え、和解と再建のミッションのために何ができるかは手探りですが昨年4月に移動しました。中規模の教会ですが、伝統ある教会のゆえにの体質転換や改革には困難と痛みを伴います。「牧師不足」が語られて久しいですが、全国の諸教会は多かれ少なかれ状況は当然違いはありますが多少なりとも元気になって、次の牧師が迎えられるように、もう暫し現場にぶら下がってまいりたいと思っています。

この巻頭言を書くにあたって気になっていることは、今どの教派やどの宗教も「冬の時代」を迎えていることと、教会にあっては困難下にありながらも信徒も牧師も、様々な地で取り組まれている現状を打破するための試みのケーススタディーや経験交流をしながら、自分の愛する教会が少しでも前進できるように模索できる場があったらいいなと考えています。私も牧師としてもう50年以上現場にいますが、若いころ多くの先輩やスピリットのある信徒の方々の意欲ある取り組みや実験に触れて多くの事を学ばせていただいたことを思い起こし、あらためて感謝しています。このような時代こそ福音宣教のエポックメイキングな時かもしれません。



<証①> 「証し」

全国壮年会連合奨学金委員会委員 古田 晴彦 (宝塚教会)

奨学金委員長の北村慎二さんからの依頼で、2024年度から奨学金委員(面接担当)をさせて頂いています。リタイアの時期とも重なりましたのでお引き受け致しました。横浜の捜真女学校(日本バプテスト同盟系)で7年間、関西学院高等部(メソジスト派)で34年間(最後の1年は非常勤講師)、社会科の教師をしていました。41年間、学級通信で「日曜日は教会へ」を書き続けました。現は部活動が活発な高校であったこともあり、生徒の教会出席はとても少ない状態でした。それでも、「『教会に来ませんか?』と言っている先生がいたな」と、心のどこかに引っ掛かっている生徒が少しでいてくれたのであれば、それはきっと意味のあることだと思い、言い続けてきました。

さて、一部の教会を除き、教会員の高齢化が顕著です。20年前、30年前の主力メンバーであった教会員がそのまま年齢を重ね、いつまでも役割を独占(?)しているから、若年世代が育たないのか。それとも、若年世代が不在もしくは少なすぎるため、シニアの教会員がいつまでたっても様々な役割から引退できないのか。鶏と卵のような関係は、「キリスト教学校が、中高生を教会に積極的に送らないことが問題」なのか、それとも「教会に魅力がないため、中高生が教会に続けて行こうとしないことが問題」なのかという論争(?)とも似ているような気がします。やはり、バトンを渡すべき世代が少なすぎます。30代、40代の教会員が少ない。子どもがおられれば、小学生以下。親と一緒に教会に来る年齢なので、教会学校の「核」ができます。中高生となり、部活動や塾通いなどが忙しくなっても、同年代のつながりができておれば、行事などの節目ふしめで教会に集うことも期待できます。では、どうすれば30代、40代の教会員が増えるのか。この妙案は? 分かりません。やはり「人生の軸」を意識した愚直な歩みしかないのでしょうか・・・。



宝塚バプテスト教会 イラスト

<証②> 「見えないものに目を注ぐ～彫刻を触れて観る活動を通して～」

片山 博詞 (西南学院教会)

「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(第2コリント 4-18)」

私はこれまで、自己表現の手段として彫刻制作を続けてきました。制作の中で、目を凝らして制作していてもかたちの狂いに気づかなかったことが、目を閉じて触って確かめると狂いがすぐ見つかることがあります。また、完成間際「できている」と思い込んで制作していると、かたちの狂いに気付かないことがあります。思い込みによって見えていないのです。そのような経験から、視覚の危うさや触覚の繊細さに気づかされ、2006年より、どなたでも視覚に頼らず触れて鑑賞する彫刻展や造形ワークショップ等を開催してきました。それは、視覚障害がある方にとって美術館が意味ある施設になるだけでなく、見える方にとっても、見えない不自由さの追体験ではなく、視覚を一旦シャットアウトすることによって他の感覚を研ぎ澄ませ鑑賞することで新しい気づきがあることを楽しんでいただきたいという思いからです。

私たちは、目撃したものをあたかも真実を理解したと思いがちですが、実は、目撃している一人一人のそれまでの経験や感性の違いで見えている世界は違い、それぞれが無意識の中で自分にとって都合のよいように意味づけした世界を分節化し、つなぎ合わせながら見ている罪を犯しているのかもしれない。現代社会では、人間の認知機能の80%は視覚から得ているとのことです。視覚に多くを頼らざる終えない情報化社会では、目の前に見えるモノや地位などへの欲望を肥大化させ、目には見えない肌で感じるような直感的な感動を通して自分の存在を確かめたり、人と人が繋がる機会が失われたりしているのかもしれない。「非接触」が必要以上に求められたコロナ禍後、一層そのように感じます。

この聖句は、私にとって制作においても信仰生活においても戒めになっています。



<今後の歩みと働きのための祈り>

- 信徒一人ひとりが伝道者、そして献身者となり、教会を担う主体となるために:
 - ◇ 信徒説教等で、無牧師の教会等で奉仕が出来ますように。
 - ◇ その為にも、神学校での(オンライン)受講等により、良き学びの機会が与えられるように。
 - ◇ 信徒一人ひとりの献身から「教役者の働きを担う献身」へ導かれるように。
- 各神学校の強みを生かした三つの神学校(西南大、東京バプ、九州バプ)と宣教研究所の相互連携、諸教会の研修に豊かに資することが出来るように。
- 教会形成を担う働きとしての協力伝道の一環として:
 - ◇ 福岡連合の姪浜教会壮年会の壱岐教会での修養会
 - ◇ 西九州連合の五島教会への協力伝道
 - ◇ 北海道連合の3教会合同 WEB 礼拝
 - ◇ 中部連合壮年会の福井教会への協力伝道
 - ◇ 各教会での協力伝道の取組みのように、各地方連合やその壮年会を通じて伝道隊を含めた協力伝道の業により、一人ひとりが元気になる、教会が元気になることができるように。
- 2025年8月22日(金)～23日(土) 第60回全国壮年大会 in さいたま(埼玉の浦和教会でオンライン併用)
 - ◇ 北関東連合壮年会実行委員長: 戸田 浩司(西川口教会)
 - ◇ テーマ:「これからの No Border な教会の話をしよう! ~教会が『教会』であり続けるために~」
 - ◇ 主題講演 講師: 朴 思郁 日本バプテスト連盟宣教研究所所長(西川口教会牧師)
 - ◇ 多くの参加者にとって良き学びの大会となるよう、準備のための祈りをお願いします。
- 2025年度より神学校献金が、神学生奨学金だけでなく、東京バプ、九州バプの両神学校への運営資金支援(年間350万円)として豊かに用いられるために。神学校献金の目標(24年度総額2500万円)達成のために、各教会が豊かに取り組めるように。
- ジェンダーレスの課題や役員、奨学金委員の改選のために: 主の豊かな導きがあるように。
- 全国壮年会連合の2025/26年度の計画案や(修正)予算案の作成のために: 主からの良き知恵が与えられるように。
- 各教会・伝道所からの全国壮年会連合の会費納入のために。

<お願い>

- それぞれのところで主にあって頑張っておられる方々やその働きをご紹介ください。エマオ通信でその証を紹介いたします。
- 第1回壮年大会(1965年目白ヶ丘教会他)開催以来の大会資料をお持ちの方をご紹介くださいますように。